第一次世界大戦期の日本の国際関係と板東俘虜収容所での日独交流について

原田哲史ゼミ
和泉宏次朗、嶋田陽一、竹内慎哉、藤田祈、村岡弘太郎、山田浩毅

はじめに

2011年春学期、私たち経済学部・原田ゼミでは第一次世界大戦時の板東俘虜収容所（現：徳島県鳴門市）においてドイツ人捕虜を人道的かつ友好的に扱ったという、平和的な歴史をゼミのテーマとして学んだ。研究内容としてまず、板東俘虜収容所でのドイツ人の生活や収容所長である松江豊壽の人物像を表現したDVD「バルトの楽園」を鑑賞し、小説『二つの山河』、研究書『板東俘虜収容所の全貌』を講読し、知識を深めた。そして最後にゼミ合宿として、鳴門市ドイツ館を訪問し、徳島大学井戸ゼミとの合同ゼミを行った。

これらの研究を踏まえた上で、原田ゼミは以下の論文を作成した。

板東俘虜収容所においてドイツ人と日本人が平和的な関係を築いた反面、国外では第一次世界大戦の傷が各国に残った。この当時の舞台となったヨーロッパ、中国、日本はどういった状況だったのか、そして各国はどういった政策をとったのかを考え、板東俘虜収容所における日独関係を明確にしていく。

第1章では、第一次世界大戦の発端であるヨーロッパ各国の政治・経済体制、アジアで戦場となった中国の政治・経済体制、その当時の日本の国際関係を吟味し、課題を見出していく。次に第2章では、板東俘虜収容所がどうして模範収容所として称えられたかを、ドイツ人捕虜の日本における収容、収容所内での日独交流、所長松江豊壽の役割ならびにその人物と背景の3つのプロセスを通して考えていく。

第1章　第一次世界大戦期の日本の国際関係

第1節　ヨーロッパにおける政治・経済関係

1890年代に入ると、ヨーロッパの帝国主義列強は、ドイツ・オーストリア陣営とイギリス・フランス・ロシヤ陣営のふたつに分かれて争うようになった。

ドイツはベルリン、ビザンティウム（現イスタンブール）、バグダードの3都市を結ぶ鉄道建設によって中東への進出を目指す3B政策を推進しつつ海軍の拡張に努めたため、カイロ、ケープタウン、カルカッタの3都市を結ぶ地域の占有を目指した3C政策をとる

イギリスと対立した。これはイギリスの覇権的地位を奪おうとするドイツの挑戦だった。

一方、イギリスは1870年代にはアメリカとドイツで工業化が発展したため、工業が世界第3位に転落し、世界各地へ投資することで利益を得るようになり、「世界の工場」から「世界の銀行」ともいうべき地位についた。また、1873年からはじまる大不況[1]はイギリスに深刻な影響をあたえた。ドイツとアメリカはこのころから、イギリスが確立した繊維工業などの軽工業ではなく、鉄鋼業などの重化学工業と化学工業を主体とする第2次産業革命を成功させつつあり、イギリスはこの動きに対応できず、その覇権は次第に弱まっていた。これにより、単独ではドイツの挑戦を退けられなくなっていた。そのため、イギリスは英仏協商と英露協商をあいついで結び、ドイツに対抗しようとしていた。すでに露仏同盟が成立していたので、ここに三国協商と呼ばれるイギリス・フランス・ロシヤ陣営が築かれることになった。

こうした緊迫した情勢のなか、1914年にサライェヴォでオーストリア帝位継承者夫妻がセルビアの青年に暗殺され、オーストリアはドイツ支持のもとセルビアに宣戦布告し、これに対抗してロシヤが総動員令を出し、ドイツはフランス、ロシヤに宣戦した。イギリスはドイツの中立国ベルギー侵犯を理由にドイツに宣戦し、日本も日英同盟を口実に参戦した。以上により、第一次世界大戦が勃発した。短期決戦の予想に反し、戦争は長期化し、死傷者は膨大な数にのぼった。

大戦下では、社会主義者の多くは祖国防衛に転じ、各国で諸勢力が結束して政府を支持する挙国一致体制が成立した。また、総力戦体制がととのえられ、民衆の生活水準は著しく悪化した。生活必需品より軍需生産が優先され、食料も配給制になった。以上のような状況[2]で、ドイツ国内ではストライキや食糧暴動がおこり、ドイツはこの危機的な状況を軍部独裁で乗り切ろうとするが、敗戦が色濃くなると、軍部は戦争と国内の政治指導権を放棄し、新政府による即時停戦を提議した。

第一次世界大戦は国民と国力を総動員する戦争であった。各国は戦争協力の見返りに、参政権の拡大を約束し、女性の政治参加も進むようになった。また、労働組合や労働者政党の勢力が拡大し、社会主義が人々をひきつけ、それに対抗するナショナリズムが力を得たのもこの時代であった。大資本と組織労働者の間で取り残されたと感じる農民や手工業者、インフレで打撃を受けたサラリーマンなど都市の新中間層なども、政治的発言を求め

1）1873年、ウィーンの証券取引所での株価暴落と金融危機からはじまった不況（尾形・後藤他2008、330頁）。

2）「長期的物量戦争となるとドイツは苦しい。ドイツは国民あげての「総力戦」体制をとり、ドイツの戦時計画経済は亡命中のレーニンに感銘を与えて社会主義計画経済へのヒントとなったと言われるが、経済をどう計画しても、イギリスに海上封鎖され、海外との通商を遮断されては、ドイツは「じり貧」にならざるを得ない。」（坂井2003、167頁）

るようになった。

終戦後、1919年にドイツとでヴェルサイユ条約が結ばれ、それはドイツにとっては過酷なものであった。また、ヴェルサイユ条約では国際連盟の設立も合意された。国際連盟は史上初の国際平和維持機構だったが、ドイツなどの敗戦国とロシヤが排除されていた。提唱国アメリカも世論に押され、加盟しなかった。有力国を欠いたまま出発した国際連盟には、国際平和を達成するための力が大きく不足していた。このようなヨーロッパの戦後国際体制、所謂ヴェルサイユ体制は国際平和の維持という点では不十分なものであった(川北・重松他2008、197-218頁参照)。

第2節　中国における列強の政治・経済関係

第一次世界大戦は、最初はヨーロッパ諸国間の戦争として始まったことは周知のとおりであるが、国の持つ植民地、自治領をも含め国の全力をあげて参戦していたため、最初からヨーロッパの枠を超えた規模になっていた。とはいえ、全戦争期間を通じて戦闘の中心はヨーロッパであったため、アヘン戦争以来、不平等条約のもとに中国を苦しめてきた列強は、続々と中国から去っていった。中国では、この状況を20世紀初頭のころより芽生えつつあった中国の近代的な民族運動に拍車をかける絶好の機会ととらえていたが、そう簡単にいかないのが歴史上、最大級の大戦と称される第一次世界大戦だった。しかし、中国における列強の動きを語るうえで、大戦前の様子を触れないわけにはいかないので、まず見ていくこととする。

日清戦争で中国の無力なことが暴露されると、すでに帝国主義の段階につき進んでいた西洋列強は、これまでのように製品の市場、原料の産地としてばかりでなく、近代産業によって蓄積された資本の投下地として、中国にあらためて注目し、利権の獲得に狂奔した。列強の国々はすでに、これまでに得ていた中国周辺の植民地から中国の内部に向かって進出していき、独占的な権益地帯をつくることに努め、フランスが安南鉄道の雲南延長権を得たのを皮切りに、ロシアはシベリア鉄道の満州横断敷設権を、イギリスはビルマ鉄道の雲南延長権を得た。そして、中国沿海の要衝に軍事的、経済的基地を獲得し、その周辺地域をも同様の権益地帯にしようと考え、ドイツは膠州湾を租借すると、これにならってロシアは旅順、大連湾を、イギリスは威海衛、九竜半島を、フランスは広州湾をあいついで租借。これら沿海の要衝から内地に通ずる鉄道の敷設権、沿線の鉱山採掘権をもあわせて手に入れたのである。このように、数年の間で列強の国々が中国を侵略し、それぞれ自国の支配下においたのである（鈴木1978、356-357頁参照)。

ここまで大戦前の中国における列強の動きを見てきたが、第一次世界大戦が起きた深い原因の一つにあげられることとして、帝国主義と称される現象がある。列強の世界への膨

張運動は、初期の段階においては、ヨーロッパの国際関係に生ずる緊張や危機を緩和し、あるいは逸らす作用をはたしていた。しかし、時が経つにつれ、列強はヨーロッパ外における競争・対抗を意識するようになり、むしろヨーロッパ外の問題に重点を置いた同盟が結ばれることになったのだ。海軍の軍備が重視されるようになったのも、ヨーロッパ列強の政治利害が全世界に拡大したことの一つの兆候であった（岡部 1978、19-20 頁参照）。列強の国々の国民的威信と権力欲が高じたこと、そして実際、列強の国々のもつ力を世界へ知らしめることに成功したことが、結果として、ヨーロッパ内部までをも侵略しようという貪欲さをもたらし、このような大規模な第一次世界大戦が行われたといえる。大戦前は、列強の国々は中国の領土や権利を乗っ取る動きが活発に行われていたが、いざ戦争が始まると西欧列強はヨーロッパの戦争に忙殺されてアジアまで手を回す余裕がなかった（鈴木 1978、374 頁）。

この状態を好機として狙いをつけたのが日本である。オーストリア側に参戦したドイツは当時、中国・山東半島の膠州湾一帯を租借し、青島に要塞を築き、港湾を建設しており、青島湾は 1909 年には中国第 2 の国際港にまで発展した。大戦が始まり、イギリスは同盟を結んでいた日本に連合国側として参戦するよう、対ドイツへの宣戦を要請した。イギリス側はあくまでドイツ極東艦隊の駆逐に限定して、日本の参戦を期待していたのだが、日本には別の思惑があった。当時、日本から見てドイツ軍の存在は、隣国である中国へ進出をするうえで大きな障害であったのだ。ゆえに、日本はドイツとの戦いはもちろんながら、あくまで青島攻略を主張し、青島還付と支那海よりのドイツ戦艦の引き揚げを内容とする通牒をドイツ側に示し、8 月 23 日に宣戦。これが、第一次世界大戦の際に唯一アジアで争われた日独の戦いで「青島戦争」という（田村 2010、11 頁）。結果として、ヨーロッパ外の国家で初めて大戦へと参加した国が日本であったが、このいわゆる青島攻略作戦で、租借地である膠州湾だけでなく、租借地外の各地に作戦行動をおこし、済南にいたるまでの交通要地を占領した。そして翌年の 1915 年、日本は二十一カ条の要求を中国政府につきつけたのである。二十一カ条の内容としては、ドイツが山東省に持っていた権益の継承、鉄道の敷設権などがあり、これは日本の中国侵略の意図を示したものであった（鈴木 1979、375 頁参照）。

第 3 節　日本の国際関係とその課題

第一次世界大戦において日本は、日英同盟[3)]、日露協商、日仏協約を通じて三国協商の

3）1902 年 1 月 30 日に調印発行された。イギリスと日本の軍事同盟。正式名称は「日英同盟条約」。日本とイギリスが、ロシアの東アジア進出を牽制するために、そして中国と朝鮮の両国の権益を保護するために結んだ同盟。ワシントン会議により廃棄された（広野 2004、3 頁、注釈参照）。

側にあった。そして日本はこの中の日英同盟を理由に戦争へと肩を入れて来るのである。では、日英同盟のどういった部分が参戦の根拠なのか。「1911年に締結された第三次日英同盟条約は、第二次日英同盟条約同様に「東亜及び印度の地域」（清国を含む）における権利または利益に危殆が迫った場合、それを擁護するために「執るへき措置を協同に考慮す」ること（第一条）、日英の一方が敵国から攻撃・侵略を受けたことにより当該地域で「其の領土権または特殊利益を防護せむか為交戦するに至る時は」、他方は「直に来りて其の同盟国に援助を与へ協同戦闘に当」ること（第二条）を規定していたので、日本が参戦する最大の根拠が同条約におかれたのはいうまでもない。」（伊香2002、93頁）つまり、日本は敵国であるドイツが中国におけるイギリスの利権を犯したと解釈し、参戦したと考えられる。さらにはイギリスからの参戦要請[4]も大きく関わってくる。この戦争で日本は中国におけるドイツの根拠地青島と山東省のドイツ権益を接収し、さらに赤道以北のドイツ領南東諸島の一部を占領した。

中国において、この当時の日本政府はヨーロッパ諸国が中国問題に介入する余力がないことを利用して袁世凱政府に対して二十一カ条の要求を突き付け、最後通牒（書面での通達）を発して要求の大部分を承認させた。その主な内容としては山東省のドイツ権益の継承、南満州及び東部内蒙古の権益強化、福建省の他国に対する不割譲の再確認、日中合弁事業の承認などであった。二十一カ条の要求に対する中国国民の反感は非常に強く、日本の最後通牒により、政府が要求を受け入れた5月9日を国恥記念日とした（石井・五味2007、297-298頁参照）。

この日本の中国に対する権益の拡大は協商諸国に大きな反感を買うことになる。まず、第一次世界大戦において中立の立場をとっていたアメリカは東アジアの現状維持と太平洋諸地域の中立化を関係各国に提起していたのだが、日本はそれに回答することなく参戦した。これによりアメリカは日本に対して嫌悪感を抱いたことは言うまでもなかった。そこで日本はそのアメリカと交渉し、中国の領土安全・門戸開放と日本の中国における特殊権益の承認とを確認し合った。ロシアにおいては1916年に第4次日露協約を締結して、極東における両国の特殊権益の擁護を相互に再確認した。イギリスとの間では覚書を交換してドイツの権益の継承を確認させた（石井・五味2007、298頁参照）。このように日本は批判を受けながらも上手く列強国と外交関係を取り合い中国での権益を拡大していった。結果として日本には大戦景気[5]がもたらされることとなる。

4）大戦後半の欧州戦線で協商側が劣勢になると、イギリスは日本に戦争が極東まで波及し、「香港及び威海衛が襲撃を受ける」場合には日本の援助を求める意向を伝達した。しかしアメリカと中国の極東中立化の意向を受けて、イギリス側は日本への参戦要求を取り消した。それでも日本はイギリスとの合意を欠いたまま参戦していったのである（伊香2002、94頁、参照）。

5）戦争によって、ヨーロッパ列強が後退したアジア市場には綿織物などの、また戦争景気のアメリカ

日本に大戦景気をもたらした第一次世界大戦だったが、結果として日本国内では成金を生み出し、一方では物価の高騰で苦しむ民衆が発生させてしまい貧富の差を生みだしたことも問題ではないだろうか。

第2章　板東俘虜収容所での日独交流

第1節　ドイツ人捕虜の日本における収容

大正3年（1914）8月23日、第一次世界大戦の最中、日本は同盟国イギリスの要請に応え、ヴィルヘルム2世統治下のドイツ帝国に対して宣戦を布告した。「ミクロネシアのドイツ領南洋諸島の占領を急ぐ一方で、中国山東省にあるドイツ人租借地青島の攻略をめざした。」（中村1997、9頁）これを青島戦争という。青島戦争では日本軍3万人に対して、ドイツ兵は5千人という少ない兵士で日本軍を迎え撃った。2ヶ月ほどで青島は日本軍の手によって陥落。しかし、ドイツ軍の投降は決して恥ずべきものではなかった。日本軍に完全に包囲され孤立無援の戦いを展開していたが、ドイツ軍の死者は約200名に対し、日本軍はその倍の約400名の死者を出した。それにより、ドイツ軍のほとんどが生き残り、捕虜となる（田村2010、11-14頁参照）。

捕虜となったドイツ人は、輸送船に乗って、大正3年11月16日から19日間をかけて日本の門司、広島、神戸の各港に到着し、そこから東京、静岡、名古屋、姫路、大阪、松山、丸亀、徳島、大分、久留米、福岡、熊本の12ヶ所の俘虜収容所に護送されていった（中村1997、11頁参照）。その後まもなく、福岡の収容所で事件が起きた。大正4年（1915）11月、将校5名が脱走したのである。その内、無事にドイツにたどり着いたのは1人だけであった。それを機に収容所側は態度を硬化させ誓約書を捕虜たちに書かせ、それに従わない者には、手紙の送受、外出の禁止などの罰則を与えた。そのような収容所の態度に対し俘虜たちの根強い不満を持った。

また12の収容所の中で、特に捕虜に対して酷い対応をしていたのが、久留米の収容所である。「かつてここに収容されていたドイツ人は今日もなお「日本の強制収容所（japanisches KZ）」と呼んでいるという報告もある。」（中村1997、12頁）この久留米俘虜収容所の問題点は所員が捕虜に対して規則として殴打することが許されていたのである。この久留米俘虜収容所の所長、真崎勘三郎が自ら捕虜を殴打し問題となった事件が、大正4年11月15日、大正天皇即位の大典を祝い、捕虜にもビールとリンゴを配布したが、将校2人がまだ日独が交戦中だったため、それを拒んだのが原因であった。その他に松山、大阪の収容所でも高圧的な所長に感化され所員たちは同等に捕虜たちを苦しめた（中

市場には生糸などの輸出が激増し、貿易は大幅な輸出超過となって1914年に11億円の債務国であった日本は、1920年には27億円の債権国家となった（石井・五味2007、298頁参照）。

村 1997、11-13 頁参照)。

このような状況で、捕虜たちは救いの手を求めて、キリスト教団体を介して祖国に悲痛を訴えた。これを受けたドイツ外務省は、日本の収容所の調査視察を中立国であったアメリカに求め、23 歳の三等書記官サムナー・ウェルズがこれを担当することになった。ウェルズは大正 5 年 2 月から 1 か月にわたり全収容所をまわり、報告レポートを作成したレポートによると、多くの収容所は過密状態にあり、建物はヨーロッパ人が生活するには狭くまた天井が低すぎると、収容所の状態を批判した。しかし、そんな中ウェルズは、一つの収容所に着目した。それは徳島の捕虜収容所である。そこでは捕虜と収容所の間に、協同の気風があるとウェルズは語った。後にドイツ人捕虜たちに模範収容所と呼ばれるようになる。その徳島俘虜収容所の所長こそ、松江豊寿（1872~1956 年）である（中村 1997、13-14 頁参照)。

第 2 節　板東俘虜収容所での日独交流

板東俘虜収容所のドイツ兵たちは、その周辺に住んでいた多くの日本人とさまざまな交流をもっていた。もちろん、そうした日独交流は板東俘虜収容所に限らず、他のいくつかの収容所でも存在したが、ここでは板東俘虜収容所に焦点を当てて見ていくことにする。

「いかに施設・設備がよく、管理者側がさまざまな気配りをしてもそれだけでは活動は盛んにならない。それを活かしたのは、俘虜生活を「勤務の一環」と考え、無為に過ごすまいとするドイツ兵の積極性である。」（田村 2010、56 頁）とあるように、ドイツ兵の積極性こそが日本人との交流を活発化させた大きな要因なのである。では、一体どういった交流が行われていたのか。その交流活動とは大きくスポーツ面と文化面とに分けることができる。

まずスポーツ面において、ドイツ人は数多くのクラブを結成し、それによってスポーツ活動を推進した。そのクラブには、板東テニス協会や、板東ホッケー協会、丸亀フットボールクラブ、クリケット協会などがある（中村 1997、33 頁参照)。基本的には球技が多いが、その他にもレスリングや体操、水泳、陸上競技などが行われていた。彼らドイツ人が行うスポーツは、当時の日本人には目新しいものばかりであった。特に、鉄棒、鞍馬、組体操などが珍しく、近在の体育教師や撫養中学（現在の鳴門高校）などの生徒が見学に訪れ、後には学校に招いて指導を受けたりもした。また、陸上競技においては、競歩大会が開かれ 100 名ほどが参加した。競歩はいつもかかとをつけて歩かなければならないのが特色だが、そのユーモラスな競り合いに地元の人々は喜んで声援を送ったという（田村 2010、76-77 頁参照)。前述で挙げてきた多くのスポーツは日本人にとって新鮮かつ衝撃的であったことは言うまでもない。また、レスリングを初めて見た日本人は自国の「相撲」と比較

し、その違いに驚嘆したことであろう。

次に、文化面における日独交流について述べていく。文化面では、演劇、音楽活動、展覧会などの開催が主に行われていた。演劇については、人形劇を含めると2年間で24の演目が上演され、再演回数をも含めれば、計58回の公演が行われたことになる。平均すると月2回ほどだが、レッシングの『ミンナ・フォン・バルンヘルム』や、ゲーテの『ゲッツ・フォン・ベルリヒンゲン』、『エグモント』、シラーの『群盗』、『鐘』、『ヴァレンシュタインの陣営』などのドイツの古典から、シェイクスピアの『じゃじゃ馬ならし』やシャーロック・ホームズの数々の作品まで幅広く取り上げられている。詳しくは、後に表を付しているので、参照してほしい（表1）。その他にも、娯楽性の高いヴァラエティーショウのようなものも行われ、観衆を湧かせた（田村2010、66頁参照）。

また、音楽活動においては、複数のオーケストラや楽団、合唱団が定期的にコンサートを開き、さまざまな曲を演奏した。なかでも、ベートーヴェンの交響曲第9番は、この時に日本で初めて全曲演奏されたことで有名である。この第9演奏は、楽器だけでなく合唱にも力を入れていたが、合唱にはもともと女性用のパートが存在していたので、それを男性用に書き直すなどの苦労は多かったようだ(田村2010、62頁参照)。この第9演奏以外に、板東俘虜収容所で演奏された交響曲は、ベートーヴェンの第1番、第4番、第5番、第6番や、ハイドンの第1番、第6番、シューベルトの第8番などがある。協奏曲に関しては、バッハのブランデンブルク協奏曲第3番、ブルッフのヴァイオリン協奏曲や、メンデルスゾーンのヴァイオリン協奏曲、ヴァニアフスキーのヴァイオリン協奏曲第2番などがある。その他の管弦楽曲においても、ベートーヴェンのフィデリオ序曲、ブラームスのハンガリー舞曲第5番、第6番や、グリーグの「ペールギュント」組曲、リストのハンガリー狂詩曲第2番、ロッシーニの「ウィリアム・テル」序曲、ヨハン・シュトラスのウィーンの森の物語、「こうもり」メドレー、ワーグナーの「タンホイザー」序曲など、非常に様々な曲が演奏された。これら以外に、室内楽もあって、そこではベートーヴェンのヴァイオリン・ソナタ第9番、ピアノ・ソナタ第8番や、ショパンの幻想即興曲、ハイドンの四重奏曲第1番、第20番、モーツァルトの弦楽四重奏曲作品157、シューベルトのピアノソナタ五重奏曲などが演奏された。吹奏楽においては、ロシャスの「波濤を超えて」、スッペの「詩人と農夫」、タイケの行進曲「旧友」などがあり、合唱曲においては、ヘンデルのハレルヤ、シューマンの波浪の民、ヨハン・シュトラスの美しき青きドナウなどが演奏された（田村2010、63頁参照)。上記で示した演奏曲目をまとめた表を後に付している（表2）。

また、上海オーケストラのプロのヴァイオリニストだったP・エンゲルという人物は、日本人の音楽指導に熱心で「エンゲル音楽教室」を開き、霊山寺前の遍路宿を手始めに、後に自ら徳島の立木写真館に出向いて指導にあたった。そうすることで、徳島の市民音楽

活動の基礎を築いてくれたのである（田村 2010、61 頁参照）。

そして展覧会についてだが、この展覧会については、当時収容所内新聞として出版されていた『ディ・バラッケ』の中で数多く取り上げられていた。もちろん、板東俘虜収容所では『ディ・バラッケ』以外にも様々な所内新聞が刊行されていた。板東俘虜収容所での印刷・出版に対する技術水準は他の収容所でも評判であり、外部からもたくさんの注文が寄せられていた。板東など統合された 6 の収容所での印刷刊行物は 70 点ほどだが、そのうち 50 点ほどはここで作られており、その出来栄えは現在でも高く評価されている。印刷所は粗末な掘っ立て小屋だったが、そこでの紙の使用量は最初の一年間で 35 万枚、2 年目に 55 万枚に達している。年間約 1000 名のドイツ兵一人当たり 550 枚、毎日ほぼ 1500 枚が手作りで印刷されたことになる（田村 2010、68 頁参照）。それらの『ディ・バラッケ』以外の数々の所内新聞をまとめた表を後に付しているので、参照してほしい（表 3）。しかしなんといってもメインとなるものが『ディ・バラッケ』であったことは言うまでもない。展覧会については、その『ディ・バラッケ』の内容の中で興味深いものを見ていくことにする。

展覧会の会場の中は雑然としているようで、実はしっかりと部門別・種類別にそれぞれのスペースが細かく割り当てられていた。「美術の好きな人はすぐに大きな窓際の壁の方へ行き、そこで何時間も油絵・水彩画・墨絵・木炭画・コンテ画を見て楽しむことができる。音楽の好きな人やそうなりたい人は隣合わせの右の隅に集まればよい。そこでは楽器を試すことができ、そうすることでひょっとして自分のまだ眠っている才能に目覚めることにもなる。科学好きの人は、中央テーブルに近づき、右向きになりさえすればよい。そこでは化学・物理学・植物学・鳥類学・気象学などのとても興味深い講演を、いろいろな言葉で聞くことができる。」（『バラッケ』第 1 巻、327 頁）というように、展覧会では単に目で観るだけの展示物が置かれていただけでなく、講演を行う工夫が凝らされていた。そして展覧会での日本人の反応だが、ドイツ人からしてみれば、展示物を見て「ご立派でございますな」や「よくできていますな」などの決まり文句を何度も繰り返す人よりも、畏敬の念に満ちた子供が驚く時のように、言葉にしなくとも、出来るだけ騒々しい音を立てて空気を歯の間から吸い込む人の方が礼儀にかなっていたようである（『バラッケ』第 2 巻、26 頁参照）。

以上が、板東俘虜収容所における日独交流であったが、やはりこの時代に日本人がドイツ人から得たものは非常に大きい。そしてそれは、もはや文化や技術に限ったことではない。私たちは、ドイツ人が形として板東に残していってくれた「ドイツ橋」や「メガネ橋」を見る度に、過去に存在した日独の色濃い交流を思い出すことができるのである。

表１　板東での主な演奏曲目（曲種別、作曲家はＡＢＣ順）

交響曲	ベートーヴェン：第１番、第４番、第５番（２回）、第６番、第９番 ハイドン：第１番、第６番 シューベルト：第８番（未完成）（２回）
協奏曲	バッハ：ブランデンブルク協奏曲第３番 ブルッフ：ヴァイオリン協奏曲 メンデルスゾーン：ヴァイオリン協奏曲 ウィニアフスキー：ヴァイオリン協奏曲第２番
その他の管弦楽曲	ベートーヴェン：フィデリオ序曲 ブラームス：ハンガリー舞曲第５番、第６番 グリーグ：「ペールギュント」組曲 リスト：ハンガリー狂詩曲第２番 ロッシーニ：「ウイリアム・テル」序曲（３回） ヨハン・シュトラウス：ウイーンの森の物語（２回）、「こうもり」メドレーほか ワーグナー：「タンホイザー」序曲、「リエンツイ」序曲ほか その他多数
室内楽	ベートーヴェン:ヴァイオリン・ソナタ第９番（クロイツエル）、ピアノ・ソナタ第８番（悲愴）ほか ブラームス：ヴァイオリン・ソナタ第１番 ショパン：幻想即興曲ほか ハイドン：四重奏曲第１番、第２０番 モーツアルト：弦楽四重奏曲作品１５７ほか シューベルト：ピアノソナタ五重奏曲（ます） その他多数
吹奏楽	ロシャス：波濤を越えて スッペ：「詩人と農夫」序曲 タイケ：行進曲「旧友」ほか その他多数
合唱曲	ヘンデル：ハレルヤ シューマン：流浪の民 ヨハン・シュトラウス：美しき青きドナウ（オーケストラと共演） その他

（田村 2010、63 頁）

表2　板東での主な上演題目一覧

1917年	6月3日	ズーダーマン『名誉』
	7月10日	シラー『群盗』(池のそばの野外舞台で)
	8月25日	アンツェングルーバー『良心の呵責』
	10月17日	フライターク『新聞記者』
	11月6日	レッシング『ミンナ・フォン・バルンヘルム』
	11月11日	シラー『鐘』
	12月12日	ラウス『パンズィオーン・シェーラー』
	12月27日	ハンス・ザックスの夕べ
	12月29日	ゲーテ『ゲッツ・フォン・ベルリヒンゲン』名場面
1918年	1月2日	ボン『シャーロック・ホームズ』
	2月6日	ヴィルデンブルッフ『ラーベンシュタインの女』
	2月23日	グリュフィウス『ペーター・スクヴェンツ』
	4月4日	クライスト『こわれがめ』
	4月22日	人形劇
	5月1日	シラー『ヴァレンシュタインの陣営』
	5月18日	カルデロン『人生は夢』
	6月25日	シェークスピア『じゃじゃ馬ならし』
	10月23日	マイヤー・フェルスター『アルト・ハイデルベルク』
	12月19日	ハンス・ザックスの夕べ
1919年	1月5日	レスラー『二頭のあざらし』
	2月23日	ゲーテ『エグモント』
	3月18日	ブルーメンタール／カーデルベルク『白馬亭にて』
	3月20日	ブルーメンタール／カーデルベルク『白馬亭にて』
	3月21日	ブルーメンタール／カーデルベルク『白馬亭にて』
	3月23日	ブルーメンタール／カーデルベルク『白馬亭にて』
	3月24日	ブルーメンタール／カーデルベルク『白馬亭にて』
	5月21日	人形劇『ファウスト博士』
	5月22日	人形劇『ファウスト博士』
	6月28日	イプセン『社会の柱石』

(田村 2010、65頁)

表３　板東での主な刊行物

○	『ディ・バラッケ』 第一巻、第二巻、第三巻および月刊の６冊
	『中国からのドイツ人追放』
○	Ｅ．ベール 『三つの童話』
○	Ｋ．ベール 『鉄条網の中の４年半』
○	Ｋ．ベール 『鉄条網の中の４年半・追録』
○	Ｈ．ボーナー 『絵画についての対話』
○	Ｏ．オイヒラー 『社会問題についての３つの講演』
	Ｈ．ヘス 『エンゲル・オーケストラ　その成立と発展』
○	Ｈ．グロースマン／Ｈ．ティッテル 『日本の小学校読本』 １－１２巻
○	『板東俘虜収容所案内　1917～18』
○	『板東俘虜収容所案内』
○	『1918年の美術・工芸展案内』
○	『板東収容所俘虜の故国での住所録』
	『俘虜生活からのまじめな詩、楽しい詩』
○	Ｐ．ケーニヒ 『収容所漫筆』
○	松山収容所週刊新聞『陣営の火』 復刻版１－３巻
○	Ｋ．マイスナー 『日本地理』
○	Ｋ．マイスナー 『日本日常会話講義』
○	Ｆ．ゾルガー 『故国の土と父祖の血』
○	『ドイツ語迷文集』
○	Ｆ．ティーフェンゼー 『中国礼法入門』
○	Ｅ．フォッケロート 『工場設計』
	『収容所図書目録』
○	Ｈ．ティッケル 『相撲　日本の格闘技』
	『板東の体操』
○	Ｋ．ベール 『第６中隊過去の映像』
○	Ａ．バルクホールン 『国民年中行事』
	その他

月刊 『バラッケ』 ９月最終号の「広告」に、補足を加えた。

（田村 2010、69 頁）

第3節　所長松江豊寿の役割ならびにその人物と背景

「世界のどこに、バンドーのような収容所があったろうか。世界のどこに、松江大佐のような収容所所長がいただろうか。」（田村 2010、50 頁）これは、板東で捕虜生活を送ったドイツ人捕虜、P・クライの述懐である。この言葉からもわかるように、板東俘虜収容所は模範収容所として歴史に名を刻んだ。松江豊寿は、この模範収容所の所長であった。板東俘虜収容所は、配慮の行き届いた管理体制が敷かれていた。この松江の行き届いた管理を象徴するのが、全国に先駆けてドイツ兵を地域の企業に提供したことである。現役の若い兵士が多かったこともあって経済的に苦しいことへの配慮からだろうが、30 名ほどが所外で就労し地域住民との交流にも役立った。

松江がなぜ、ドイツ人捕虜に人道的に接していたのか。それは「会津・斗南」体験、そして「韓国」体験から見ることができる。松江は戊辰戦争で苦汁をなめた会津藩の出身である。松江が生まれ育ったのは、廃藩置県後の若松であるが、周りの人から、戊辰戦争での惨状を繰り返し聞いていた。「かれらも祖国のために戦ったのだから」(中村 1997、15 頁)という言葉からもわかるように、戊辰戦争での会津人の苦い経験が、捕虜となったドイツ人と重なり、松江は、「武士の情」をもって、捕虜に接したのである。次に韓国体験である。これは、韓国併合の時代に松江が、「韓国駐箚軍副官」として、韓国に赴任した経験のことである。韓国での副官時代に見た、力によって抑え込まれ全てを強要される韓国人の姿は、松江に敗者のみじめさを思い出させたことだろう。これらの経験から、松江が、「武士の情け」「敗者へのいたわり」をもって、ドイツ人に接した理由だと思う。松江の心根を、支えたのは武士としての誇りであり、この純粋なこだわりこそが、会津人としての信念だったのであろう。しかし、それが日本人という枠を超えて、他国人とのかかわりにまで広げられたとき、それは、人間が人間として尊重しあうというヒューマニズムにもつながってくるのではないだろうか。

ここまで、松江豊寿について述べてきて、板東俘虜収容所だけが素晴らしい収容所であるかのように、書いてきたが、実はそうではない。当時日本にあった収容所は、久留米を除いて比較的良好なものであった。

明治政府以降の日本は、幕末に結ばれた不平等条約の改正を目指していた。これは、明治政府の最大の課題であった。しかし、欧米諸国が条約存続の理由として、日本が欧米並みの文明国ではなく、他国居留民の安全や権利を保障するだけのレヴェルに達していないというものだった。日本政府は俘虜を人道的に扱うことで、文明国としての日本を、戦争条約を重視していることをアピールし、条約改正へとつなげたいという思惑があった。

また、明治以降の日独の関係が良好であったことも、捕虜収容所が比較的良好であった理由として挙げられる。日独の良好な関係は、当時の日本研究の第一人者であるP・パン

ツァーの「第一次世界大戦から国際連盟脱退までのドイツと日本」という論文からも明らかである。「パンツァーは両国の間には他国に見られない「特殊な和平のための」条件があったことの確認から始めている。青島戦争も日本がイギリスに利用されただけで、ドイツ兵は日本兵に悪感情を抱いていなかったとも述べている。戦時中もドイツ政府は日本との関係を前向きにとらえ、漁夫の利を得たとして日本のずるさを非難する「黄禍論」を極力抑えようとしていたという。さらにドイツ政府は交戦中にも日本との交易を続け、外交面でも日本との関係を損なわないよう配慮している。」（田村 2010、24 頁）

このように、日本の当時の国情や、日独の良好な関係など、ドイツ人に親しみを持てるような外的状況は整っていた。しかし、それをどう活かすかは、実際に運用する人々の姿勢による。これらの条件と、松江豊寿の「敗者へのいたわり」の心があったからこそ坂東は模範収容所として歴史に名を刻むこととなったのではないかと思う。

むすび

ここまで第一次世界大戦期の日本の国際関係、そして板東俘虜収容所での日独交流を見てきた。私達は、ドイツ人捕虜を人道的かつ友好的に扱ったという事実の研究を通じて、日本とドイツが今のような関係を築いている根底にあるものとして板東俘虜収容所を捉え、様々な側面から学んできた。この論文を通じて、あらためて、日本とドイツの交流を歴史的経過から見ていく意味を皆さんに伝えたい。

【参考文献】

伊香俊哉 2002：『近代日本と戦争違法化体制―第一次世界大戦から日中戦争へ―』吉川弘文館。
石井進・五味文彦 2007：『詳説日本史Ｂ』山川出版社。
尾形勇・後藤明、他 2008：『世界史Ｂ』東京書籍。
岡部健彦 1978：『世界の歴史』第 20 巻（『二つの世界大戦』）講談社。
川北稔・重松伸司、他 2008：『新詳世界史Ｂ』帝国書院。
小林啓治 2008：『戦争の日本史 21　総力戦とデモクラシー　―第一次世界大戦・シベリア干渉戦争―』吉川弘文館。
坂井榮八郎 2003：『ドイツ史 10 講』岩波新書。
鈴木俊 1979：『中国史（新版）』山川出版社。
田村一郎 2010：『板東俘虜収容所の全貌―所長松江豊壽のめざしたもの―』朔北社。
中村彰彦 1997：『二つの山河』文藝春秋、文春文庫。
板東俘虜収容所新聞『ディ・バラッケ』第 1 巻、鳴門市ドイツ館史料研究会訳、1998 年、第 2 巻、2001 年。
広野好彦 2004：『国際学シリーズ 3　日本外交史ノート―第一次世界大戦から現代まで―』晃洋書房。